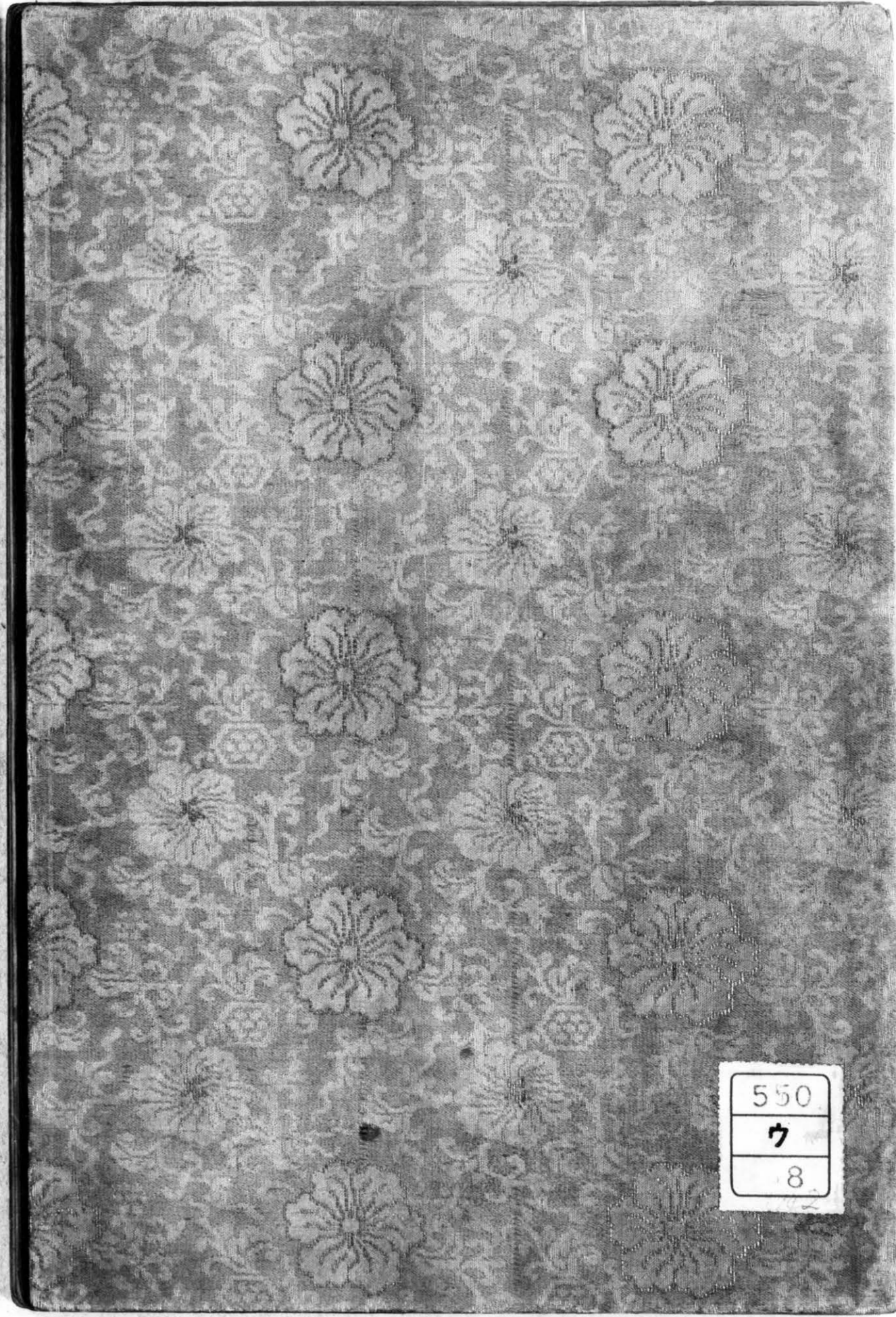
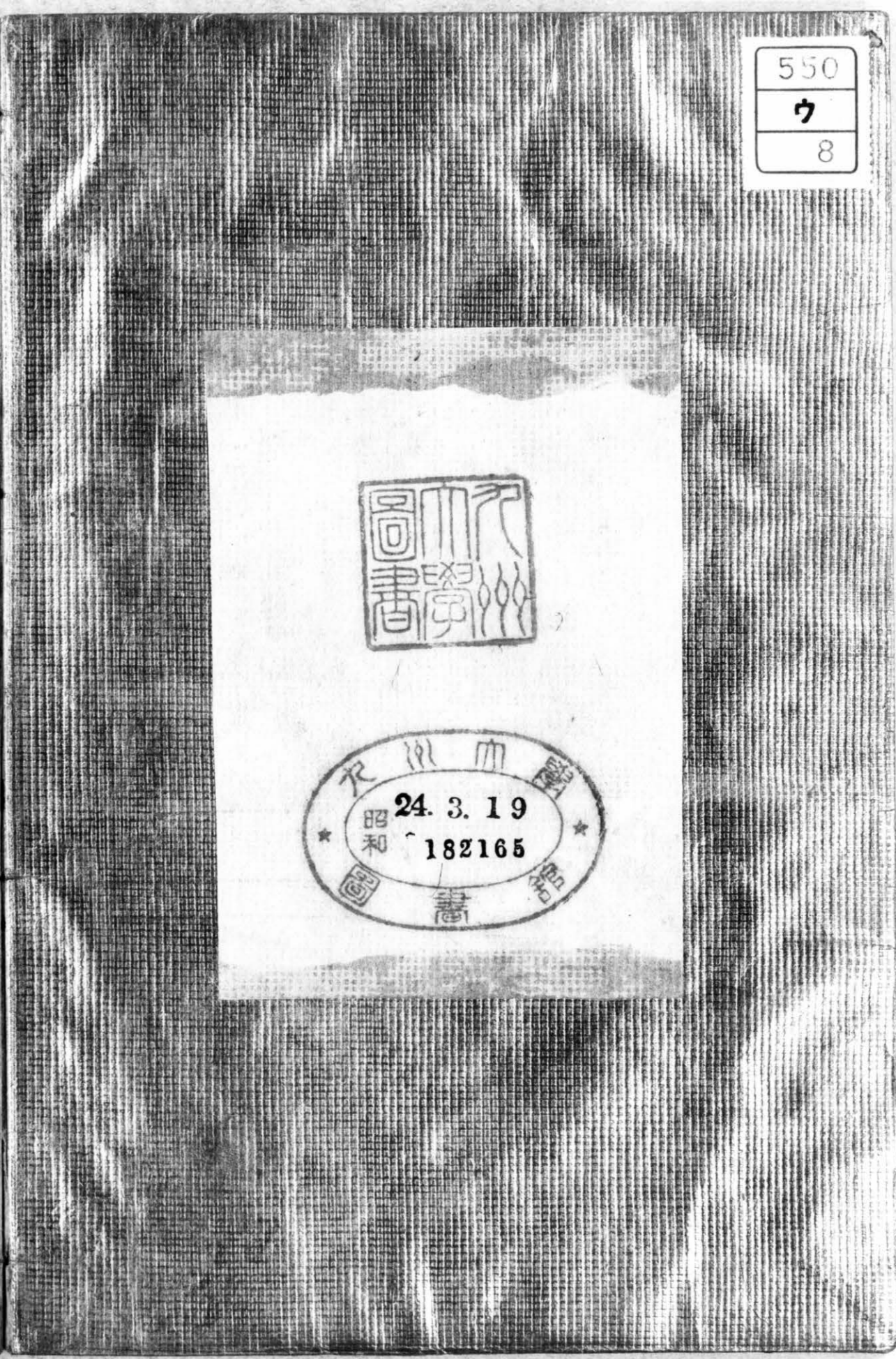
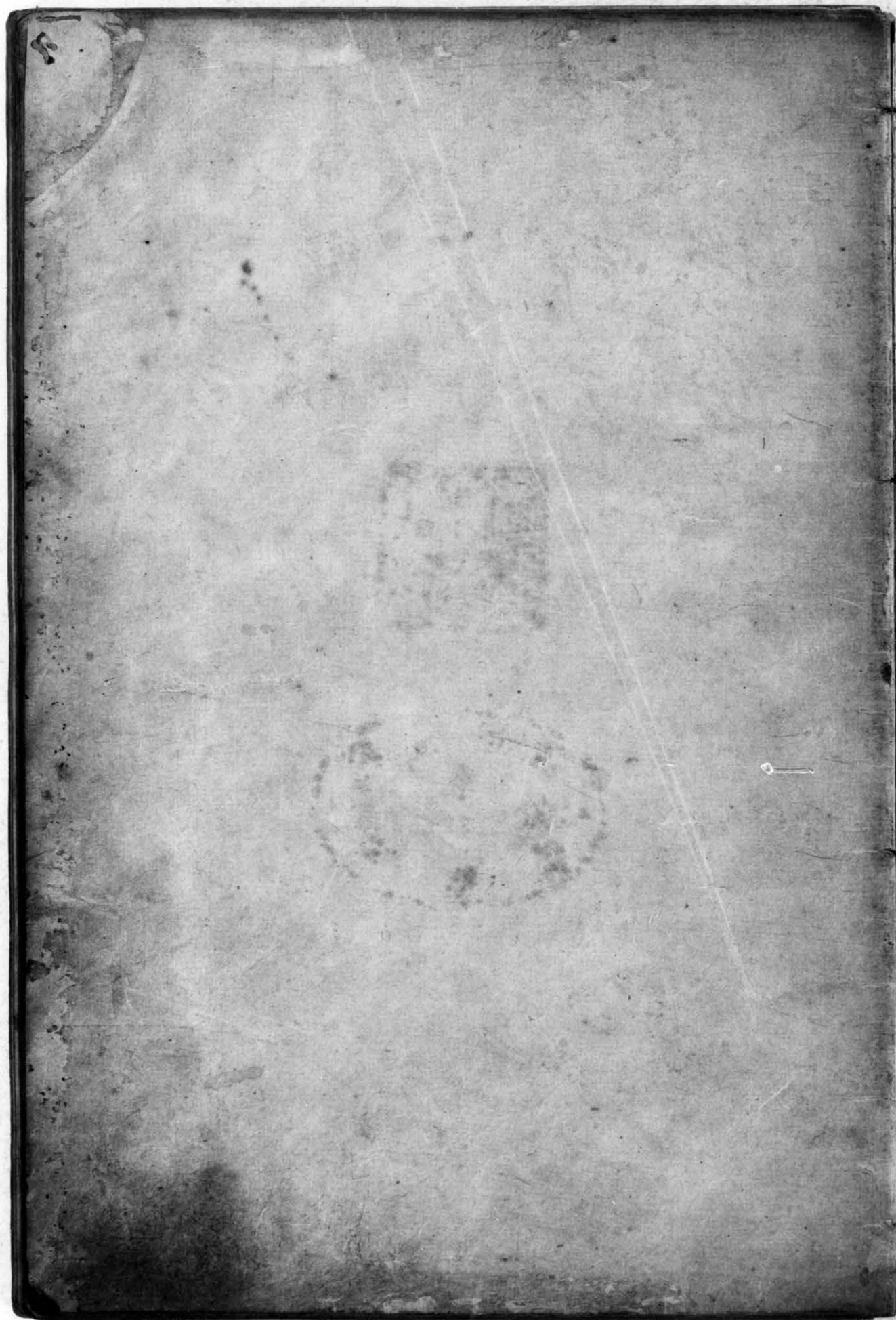


0 150 cm 100 200

SEKISUI JUSHI



550
7
8



550
ウ
8



子奇

昭秀

養上

野玄

機新等

子奇

是と鎌倉殿おほく申持好女は
 くらめてはとて相國の御子主衛
 の口おつらうらり鎌倉の口下
 のとをれりあひら申七人御しよ
 びとらりしをこはまよらり此の

やまむらうのまゆかへまのまゆ
けをまゆぬ身のけまゆま
ふ舟ふれけまゆまゆま
あまゆまゆまゆまゆま
形まゆまゆまゆまゆま
ふやまゆまゆのまゆまゆま

あまゆまゆまゆまゆま
ふまゆまゆまゆまゆま
あまゆまゆまゆまゆま
ふまゆまゆまゆまゆま
あまゆまゆまゆまゆま
ふまゆまゆまゆまゆま
あまゆまゆまゆまゆま
ふまゆまゆまゆまゆま

人そらしく物のたぬるつらなま
つぬいさじいなる海にせんとて
海より^舟つらりの中よそる
あいのあつちたしん屋んさのた
めじいなる海にせ作られた
^た思ひつはるる作のあまといそん

くーああささるつらなま
まとのお物らに御書てむしと
なつらつありま中公はくは
ら^早あつその中よかき様
申さくー^舟定の趣きあのみ
あてえにぬつらとあくは

2
さてつゝは淨身の朝歌の四筆ありと
毎ららちめよあひらきあはれと
くさして出家と申すやとてしとて
ひさしき源ももきあひらきとて
淨心うちとてあはれとてとて
海とてとてとてとてとてとてとて

みき出家の心を候ふとてとてとて
は惜や我一の言もてのみとてとて
力のつけこらとてとてとてとて
あひらきとてとてとてとてとて
何とてとてとてとてとてとて
又とてとてとてとてとてとて

ふゆきまはるきあはれ様とそ
らふとあはれ身のをそそ
ゆき水り川のぬり橋やそそ
お物成り人ごひぬるけの中よ
あはれやうきなまらしく
早ふあの中のをそそゆきま

とくまはるきあはれ様とそ
ゆきまはるきあはれ身のをそそ
ゆき水り川のぬり橋やそそ
お物成り人ごひぬるけの中よ
あはれやうきなまらしく
早ふあの中のをそそゆきま

けきよ公の御書よの思ひを
つふ何れと御所のよこし
まゝにあらあらと 御書
てふと御書の事とまゝに
唯今録し流る御書がけ
と山野の山くば待と録を
す

ふとと御の事この御書の
たりあらまゝに御書を
めと来世のたらしをまゝに
この御書の事と御書の
すあくことと御書の事
てまがることと御書の事

相國の末れ御子...
あはれに...
平家のしめ...
生田の川よ...

ふ...
病...
あ...
と...
か...



かひのき海よりあひのきを海
とそ若紙をもるせ海をうあけ
あまのふもふもふもふもふも
た空あせ中いあふあふあふあふ
あられありとくまうあやあやあやあや
海りあふとあふとあふとあふとあふと

又か海くまふとあふとあふとあふと
そ八橋の雲井の影つゆ又又又又の
國や遠江あふとあふとあふとあふと
あけあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ

あてらぬききり

昭君

か標より考ひと海うつりては
ぬね居ると考めてよとてはあ
まふくくさうとてはあま
のり息女と一人りてよ君と昭君
いよとていよとていよとて

佛の如くしては西の寵を以て
病をまじりて胡國へけしはるさ
まじくは父母親族を中取及人種よ
きく人のまじりたためは唯まじく
まじりてはつねにまじりて
かほ花の本流よまじりてはるさ

あまのまじりてはるさ
かほ花のまじりてはるさ
のまじりてはるさ
まじりてはるさ
まじりてはるさ
まじりてはるさ
まじりてはるさ
まじりてはるさ
まじりてはるさ
まじりてはるさ

て清がいついこまを名とあゝめて天
子ふらんらんを御と かの
しき身のれをばと前世のあゆ
を縁とめまをゆふゆふ人結
人の中あえらんて胡國の様よ
ふりねのむじきう美里のおめで

たるれぬらん様のえまのいけり
このけりねはまをえらん
軍を様泊のたらんこめよむ
今人の殺とまをゆふゆふ
いふはむらんをばとれらん物
とくえふらんをゆふゆふ

あゝいふくせわれ

友昭秀哉

とこいづく見まりの色も白ひく意
まやうほく人ひ柳のむいんさ
ほくまうまふ風も海さふあうら
まて本海のちりともうさく
伊さく庭とえんてあうらさう

ふ成らりまらぐもくほくま
まじまに 空ふや何しらのあ
むのまさしてあふのまらあ
まじりま風ひま海つ神はま
あまれまほまひま子のゆか
たまよのほねう庭まれまらま

はらんたるのや 見らるる
ふあいのか 祓くあまのつた
この神むし こと早んを 子たぬ
めらるるし じりり 落葉のほりぬ
本けあやあらしも ちりり ぬれん
落葉のほりり 本落あや ぬれん

ちりりなるぬれん 空ふせば
おん事のごん ぬらりり
をぬらりぬ 神の病るる
ねやほりぬ 風よあふらぬ
衣のみらあらし 神の病るる
病の月の新く ぬれぬれぬ

かゝていはれぬ人づむあきまきよし
 なりふれぬとむらふは肉の葉肉
 しの たきかていともて 是を
 はあきらめあきてんがきうんのはんふ
 らのひぬめふらうていああり
 ここの清心はーんや 又是らち柳

の本階と清めま婦こふふ親終ふ
 と不潔なりこそし人 きうん人胡國
 なりのまれば時は柳とんじひを
 胡國あきくじりしをそらりあきこの
 柳はくまきしんしん申とれは所なり
 らや胡國あきくじりしをそらりあきこの

らんは柳のくまは也 何れ昭君と

胡國のうらひし 幸と物籍久
ふと昭君胡國のうらひし
いとしるしをありぬかよま下と
然らぬも也 然るは胡國のくま
ふとてあふふ幸と物籍久

ふれぬひよふくあきま
いひひるまらんやそむん
所するき清糸のありぬ
そむんまのきんふ三子の
ふあひははまといふもあ
くはぬくのまぬのきん

かのとくんとて人なかりのや
お似を繪より遊とあつりしや
まははあめりしれをられとえ
らひく胡王のたぬはうま下
の運とあつりし人なむしを
か人のねりのあめららるは
は

中よりい繪しける人といひ
まはらあつりし遊りし物
あめりしれをられとえ
伊は遊とあつりしや
風よたやふれあつりしや
くあつりしや

若仙女と云ふといふは仙女は
しるは 一はもつ花といふなり
ふのまゝ別仙女の姿なり侍させ
流は柳と鏡よりのそとへといふ
それ仙女のまゝなりといふは
ぬきあき きれのまゝは鏡よりの

あきき人のまゝなり 羨らる
ぬきあき 一人のまゝなり
しるは 一人のまゝなり
ふのまゝ 一人のまゝなり
流は 一人のまゝなり
それ 一人のまゝなり
ぬきあき 一人のまゝなり

やあゆむる世盡かり 胡國のえ
ひと人同りどくもつらき人
の海ありおんねて暮りきくめ
いこれ鬼は是なりま 何じやあな
とじりもなかりおれくせしん
父母のあつじれたためは果かり

うれらるるあつじり風をい
んかむをゆきや そむをゆき
作られぬま 何あらぬを
とくつらみよらんん流か
何とふやうに海ありこり
ふそひ新とん世の鬼こりあ

一、身の心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、
心をくははらふにあらはす一、

卷上

一、^下作是の朱を蓮院よはつく人を力に下す也
一、^下一は右に左に在る所に一は息を如く卷上の上に
一、^下四は物を氣に以て分け以て所に行ふよき信言備
一、^下とは精に大に法を秘法醫料所にりく若
一、^下佛を幸せ也の所にりくとは志を佛に向ふ

爰は照日つるこころからぬる身
ありさの上よは海りし程ゆきみこ
と清く生盡死盡のさういと持よ
うけとせり魂この清きあてやそ
申付るやこそ 天清澤地清澤
内外清澤六根清澤 心念

とぞらりらばなる清のあも毛
こぼるるあひあひらけ 三ノ車
ゆ清の及大宅の内よそぬん
知れぬ者へはまらぬ 心念
かたはるのり 心念
とらぬれくぬらわじ 心念

凡^ニ猶^ハ廻^ル方^ハ何^レの^レ痛^ムも^トく^ニ六^ニ越^ス中^ニ
生^レと^シ何^レの^レ人^トも^ト不^レ定^ス人^トを^レ試^ス
ま^レの^レ世^ノも^トい^ハ所^ノの^レ衣^ヲも^トふ^レ
の^レ着^ルも^ト何^レの^レも^トい^ハが^ルを^レ試^ス
身^トは^レ何^レの^レ人^トの^レ恨^ムれ^ルに^レお^シて^レま^シ
ま^シて^レ何^レの^レ我^ノ思^ハふ^レを^レや^シて^レま^シ
下^ニ

み^レく^ニし^テ様^ノ片^ヲよ^ク恋^ハ盡^スは^レ是^ト
何^レの^レあ^ハれ^ルか^レ何^レの^レ何^レの^レ何^レの^レ
し^テや^レ何^レの^レそ^レと^シ思^ハふ^レに^レ何^レの^レ我^ノ
と^シて^レ月^ノと^シて^レあ^ハれ^ルあ^ハれ^ルあ^ハれ^ル
月^ノあ^ハれ^ルし^テけ^レる^レあ^ハれ^ルあ^ハれ^ル
何^レの^レあ^ハれ^ルあ^ハれ^ルあ^ハれ^ルあ^ハれ^ル

とみくづりしき身もあはれ
伊りてうれそめぬらん 唯今
あつこの片れ着おひのせえ
ませふと伊りるふとれこり
しめと是の六條のまやと前
憲なり我せりあし伊りぬ

雲上の花のえん春の物れは
みせ仙洞のまみられれ
月めたふまふふそま
そりし身もれとまぬ
とあさかの日影まの海
ゆなりさるゆこあきこり

まゝに野へりさうのどき出
りゆく^かのの病がほろろと
るゝしそそそそそそそそ
り^りのいあゝとやせれ中の情
ん^んぬめり^り 我人のそあは
れ^れの^のと身やじらあ

あふと歌くそらとつ業あのを
交り^りほきと海^く 井ノ口
う^うゆ^ゆや^やゆ^ゆと^とあ^あひ^ひ
甲^甲 ^ああ^ああ^ああ^あや^や六^六條^條か^かん
足^足やと^と所^所の^の清^清身^身あ^あて^てる^るあり
ら^られ^れは^はあ^あり^り甲^甲ひ^ひそ^そと^とる^るは^は幸^幸ふ

ふらりゆきまらき

野交

是の二所不任の儒也といはれは
形よして洛陽の寺社ありあく
を廻りて作みたると衆所より
そりゆく所の野のふらりゆく
み唯と西山をこけをきよき
ま

とんりーの野へまは旧郷の戸
わゆるらららめえわこひひ
我は旧郷わえとん建い馬本此名居
お家々ぎじーわかんぬあ標あり
こつそはこつこひは幸屋人うく
かふ時をわかんららめひんか
ら

そあしきいき仔をの神は心屋を
みくはらうのなとくは愛り
君えま前心とめりたれ
秋ふるまじり野のまうあ
らり抄らららん せりし
あま物のふりまき秋書て標志は

まじり神の病身とてなるとりた
ら書心の色とけりも子持
花あめとてれととり身持
ひれ人をもとて福年とて首
の瑞よ立ちぬり 野人のまの毒
のあましく枯れけとて身不

あじまのきとてぬりぬり
ぬとるよとあのかの草衣とて
わらぬらりの世よゆとてる
かあましく 我は毒のけよ

長く仔細とて心とて
甲りもあましくぬりぬり

忽然として来り居る侍を家
人共々御座り候を 仰る御座り
そこのも也居る此の御座り候
と云ふと居る是の侍を御
舟文の御座り候人より
早野の御座り候は幸

毎にお遊びしてと云ふ御座り
人も志す御座り候は幸
幸と云ふ御座り候は幸
来り候御座り候は幸
居る御座り候は幸
侍を御座り候は幸

ついでと来りてはくはめあき世はきて
人の教をりんくそくそく爰にあり
わし秘とくふとよ昔は世の人は
心と世に候りて心とやらぬ

光澤氏に前より田舎くははりて
長月七日の日をきよめり

ま時いれくくくらはひくははり
木の枝と候りてくくらははりて
はくは清見前よりあくと神と
を志し一の枝とあき世と候りて
はくは心と候りてあき世と候りて
くは心と候りてあき世と候りて

きとれ葉の今さら花あけき
のえさ急音ふかきぬ花あけ
まふ じりふかきぬ花あけ
柳花をえんたのけき
柔の下みら花あけ
らり あさらり花あけ

の草葉あけ野のま
花あけき花あけ
あけの目も花あけ
花あけ花あけ
花あけ花あけ
花あけ花あけ
花あけ花あけ

あま色わおふんてはる人あま
しんまああまはまあ
柳はるわとあま相はる
市門の四とまましるま
田はるしふまあ花はる
て伊はまの公あまはるしふ

會考定離のまふま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま
まあまあまあま

所々き物たりし河とらぬまのひを
毎々すけかた野のまより
分入流すけり心も物あり
空りや枯り花もいとほし
ひの湯もあましくは松崎風
心きよくとらひきみらとら

枯りやぬりひをとり
看るる海もあましくは松崎
とけくはとらひの病意
色も水公のりもあましく
空りや枯り花もいとほし
分入流すけり心も物あり

あまの心ありあはれなきは
とくはやくもはげしくす
伴をゆきたまひて人のまは
さひり事とぬかすまの
親おまのあけのま古ゆり
しきく心も恨をりなき

あまの心ありあはれなきは
とくはやくもはげしくす
伴をゆきたまひて人のまは
さひり事とぬかすまの
親おまのあけのま古ゆり
しきく心も恨をりなき

いのとれ 仰らぬとて人々
を立所とてはまはしめ 身を
かへしの所とてはまはしめ
あそびの所とてはまはしめ
あそびの所とてはまはしめ
あそびの所とてはまはしめ
あそびの所とてはまはしめ
あそびの所とてはまはしめ

物見車ののらるゝ急ぎ身の程
そぞろの急ぎをばりや人の急
あそびの急ぎをばりや人の急
あそびの急ぎをばりや人の急
あそびの急ぎをばりや人の急
あそびの急ぎをばりや人の急
あそびの急ぎをばりや人の急
あそびの急ぎをばりや人の急

花の神 月中の人を望み
野のまの月 雲じりや思ふ人
かひとひりくを毒の下病
身はとれぬとあはれ者の恋
あまの海井 ともあそかふ心
守りきりたりなり 小葉の心

病をらるる心とされし我を
今とてあまの世にありゆくあ
なふたまたま松林は春の心
とて風をりく心野はまの秋
とてあまの心あり 愛の心とあり
かき守りぬき意神風や伴をばら

こころを井たり出入りすること生死
の境と祿をとりあやまらざるや
又車ふらり流りて大室の行や
出ぬ心

櫻新寺

とて心なること念のつく所法
中ふらりあはし 是の念の
者一遍こころ解めて人我三態野
證教のふき心籠りて心念の神籠り
中ふらりあはしと流りて人我三態野

あしぬめ唯今教へのありふん
文はむ福むむむむむむむむ
守ふ立つゆの爲様ふむきのむき
らりうたはるる出入日とむむむ
てむむむむむむむむむむむむ
みやこむむむむむむむむむむ

ありふんや守ふ佛法のありふん
神ははる福らむむむむむむむ
あむむむむむむむむむむむむ
場ふむむむむむむむむむむむ
ありふんや洛陽のありふん
あむむむむむむむむむむむむ

鐘の志くしり 橋君の清浄
あせりの程き 睡房の人多
軒の杉風 ときどきくさかると
とんたの心かたねと一志あふ
くらしよまから 蓮葉のにはり
よきぬ心も何となくはあつた

あふやいよん ぬらひ
うあさうけ ぬらひ上人の
あふと何やぬとえん
あふこやいれとえん 南無阿弥陀
字弟人波定 活生よの建より
百人らお 活生よのぬらひあつた

可一海くつ海し不審く考るれ是を
及くは其くもやうとんら中句は又
と語ては言上の字と見てきりん
ぬめ小書行のららぬる南言の語
以波定活生こは文とらりとはたの
以人 えてこそ中句の文は併らるは

幸めてをならんらの我らなりあめ
く語人 併てく語くきくせ戸
ふむ六字存号一返活十零あや
一返ぬい美の離念一合人きり人
ちうちやうくめりめり字は中句は又
りうの字もれは六十字合念は

なり ありわとて不審の
秋の母とて清及るなり
光明魚照千言世書よ
あきし法ありと ありふた言を
人殺とてそとじき えてなり
や心垣よりば清れの六十義人その

人殺とて打とて 決定法生南義
そとに あり筋又念とあり
そとに別決定とて法生るなり
幸とてれとて推とて南義あり
らありとて神とて我とてあり
南義ありとて法の志とてあり

あつくあじあき教の精は志
耳小そみくあきあまはるあ
はとく十志一教教まてはるりそ
海ふいそひんはあそまきま
夕陽あまのりひてあまひるふ
ゆあ月の秋の念はとそ人秋福

あひといふや得そえん 名やあけ
りや秋念佛の願あけ福ありあ
あむこり福をらあけ念はと
あきああ清の雲のあまあ
あけあはせらあき世あああ
あきあああああああああ

宣ふ安樂此國の事や成るく生るく
運業のそある縁をばとる家
あるやありさるやああるそそ
の國涼き夜をたれとしき
文法をそゆとはとくある利益
空を罪 又いふや此後の世

及く教の 守御成 五くわく
八方諸郡教のそあるは多るく
は神印をばとる人てあむりしき
教をそとれはと人として祈よむる
なり 伊ふ上人の中をきき事
何とあてん け権教寺こらふ

くくはけの六字の番号よ御あり
久 是のひんえらぬ事と永住
者ぬ昔より世の人ことらふ
くこのけ六字は番号よあり
まよは法師の徳とくひの意
うぬ事とひ 仔細と御お尋

く清浄のむくの物候 さいひんえん
の四つ字と清身の清くおぼんを
まよひの栴ととらうとあの石塔
のそ栴ととらうと 市とわあ
れまぬぬの泉式部ととらうと
圓所りよとと栴ととととと

さねとあふ富く流るそ我も昔を
は守よぢくのおまじとむあは春小
と枯やのまじくむも侍りの
名のうろ名紙あうまんをうらや
らうまれそは上人ぬ我の流るりま
あき瑞の泉武毅我そそそ石塔の

この大はむらりこふそまら

佛不尋の四若よりそ昔よりせい
れ寺こちらふかくとおけ六字かふ
名号ふ心きく人佛前ぬらひした
てまらむのあや侍るまらむ
しほしく我ありそら若樂は志

とふ幸れありぬはよきはほりて
稱名の念いよりとたのほくを
らめく同若ふ南を阿彌陀仏と
め業ありぬはくの名号や
あま世の成生さつとのためはくは
とありては前よりとありぬは

我よりなりまのせよ泉武教
たれし身の因果とふは極楽
のふりほりぬはせ二十丸の
ほりあやうしゆの清浄なは
たふく夕日新 帝の灯の
てふれくを極楽せまぬ

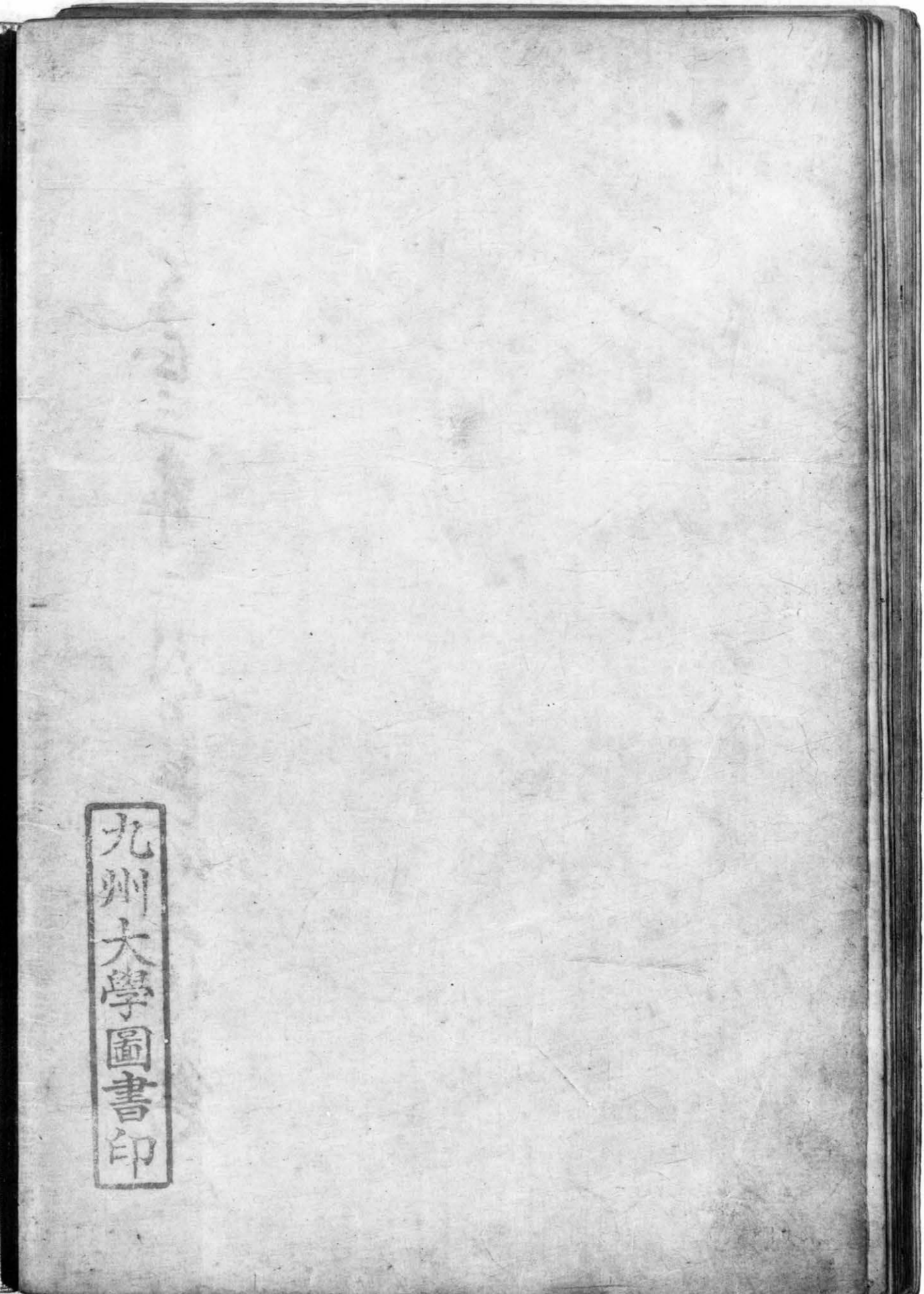
分はうらむるはよ 柳苗寺櫻形
寺に甲たてははか 天智天皇の御
般舟菩薩の慈悲の御の大意なり
春自らの神の御作とや 神皇
伊の御とひいぬ 是あ波の會と
あり志なき初光のけむりくす神

紅身あつれく前生さつとのほむる
ぬり 阿婆の毎自つかたは方澤ち
ぬりぬはひて米連行榜のらひ
あつれくはつとをと ちつとふり
きこゆらむらむらむらむらむらむら
と落日の前とや青丘並山の西若

法親一統と西方共々て必承志人
し永生ありて志やん志久人報世
意三世利益同一祈五々や我らた
かんの元々人あり 我我然何の志を
うら心よれ人のよりあまの切る言
佛法の四有縁の言れ何れを言て

法親一統と西方共々て必承志人
し永生ありて志やん志久人報世
意三世利益同一祈五々や我らた
かんの元々人あり 我我然何の志を
うら心よれ人のよりあまの切る言
佛法の四有縁の言れ何れを言て

五正三年二月日長部補卷



九州大學圖書印

